

中年女

中年女

丹羽文雄

講談社刊

ちゅう ねん おんな
中 年 女

昭和三十六年七月十日 第一刷発行

二九〇円

著 者 丹 羽 文 雄
に わ ぶ お

発行者 野 間 省 一
東京都文京区音羽町三ノ一九

印刷所 株式会社文弘社

(製本大製)

発行所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽町三ノ一九
振替 東京 三九三〇
電話大塚(九四一)大代表三二一

◎ 丹羽文雄一九六一

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

中
年
女

装
幀

初
山

滋

階段の下から、肉感的なトキの声で、

「藤木さん」

「はあい」と、青年の返事があつた。

「ごはんですよ」

「はあい」

部屋の片付けも十分にすんでいなかった。謙は部屋をみまわしてから階段を下りた。今日からこの家に下宿することになった。午後おそくひっ越してきたばかりである。女主人トキの口調は、いく人も下宿人をあつかってきた風である。今日はじめての下宿という

固くなる氣持を謙にあたえまいとする細かい心づかいからだろうか、馴れ馴れしいくらいである。よくとおるトキの声には、そのからだつきを思わせる肉感がこもっていた。白く、清潔で、こつこつとした肉づきの、親しみやすい三十九歳である。人柄のせいだろうか。根から親切的な女がもっている口調である。茶の間には、すでにこの家の家族の顔がそろっていた。謙は長男の裕一と、娘の良子のあいだにすわった。正面が、トキである。食卓には、ごたごたと家庭料理がたくさん並べてある。

「藤木さん、下宿の経験がありますか」と、トキがきいた。

「農事試験所へ二年かよっていたあいだ、下宿しました」

「道理で、下宿慣れがしてると思ったわ」

「そんな感じであるものですか。気がつかなかったな。どんな風ですか。自分のことだけ、よくわからない」

「そういわれてみると、返事にこまるけど、借りてきた猫のようにしていられると、こちらも窮屈になります」

「おばさんところでは、これまでたれか下宿してたのですか」

「いいえ、ひとをおくのは、はじめての経験です」

謙は、おどろいた顔をした。

「どうしてですか」

「ひと扱いが何か板についているようだ」

すると、口の重そうな裕一がにやりと笑った。トキには、その反省が足りなかった。良子は謙が食卓につくと、顔を伏せて、何となく窮屈そうにしていたのだが、慣れないので、恥ずかしかったようである。が、それもすこしのあいだであった。

「お母さんの職業のせいだわ」

と、良子が笑った。

「職業って？」

トキがききかえした。

「はじめてのひとにも、十年の知己のように親しそうに口をきくわ」

それで、トキが笑った。笑うと、きれいな歯並びが印象的である。

「藤木さんの観察は、まちがってないわね。私はこれまでずうっと電気料の集金と、保険の代理人をつとめてきたのだから」

「それでわかった。ひとあたりのやわらかなのは、職業のせいだったのですね」と、謙は安心したように納得した。

「よくしゃべるお母さんだと呆れてしまうことがあるわ」

良子には遠慮がない。

「しゃべらなければ、商売はあがったりだわ」と、トキは謙の顔に話しかける。「亡くなった主人というのが、時計の振子のように、会社と自分の家のあいだを往復するだけで、まことに忠実な会社員でしたからね。私は十八のとき、ここに嫁入ってきたんですよ。私もお百姓の娘だったけど、やっと勤人のおかみさんが板につくようになると、ぼっくり主人に亡くなられたのですよ。交際や、出歩くことが嫌いだった主人に感化されて、私も自然とそういう人間になってましたからね。保険の勧誘員の仕事が板につかなくて、半年の

余もまごしましたよ。だんだんとしゃべれるようになった。考えてなくとも、ことばがすらすらと口から出るようになりましたよ。昔を知ってるひとは、私が別の女のようになったとびっくりしてます」

環境が人間をつくるというのだが、もともとよくしゃべれる素地があったからであろう。本人にも気のつかない素地だったのだ。謙は、自分のことを話した。私大の農科を卒業していた。卒業後しばらく家にかえていたが、果樹園の経営に興味をもち、県立農事試験所へ二年かよった。そこでは、助手のような立場だった。

「この村でも、最近は果樹栽培がさかんになってますからね」と、トキがいう。

「ぼくは、この村の指導員という形でよばれたのですが、ここ三年みっちり、実習的な勉強ができると思ってるんです」

農協組合から藤木謙はまねかれた。下宿を世話してくれたのが、農協組合である。組合の事務所が、この家のとなりであった。

「この家は、清潔ですね」

「子供がみんな大きくなったせいですわ」

「しかし、根がきれい好きでなければ、こんなに清潔な感じはありませんよ。ほくもせいぜい皆さんにならしましょう。ほくは次男坊なので、長男ほどに大切にされないでしょう。自分でもどこかしらないところがあると思ってるんですよ」

「自分でそう思ってるのなら、大丈夫ですよ」

謙はすこし肥り気味で、血色のよい肌をして、清潔な感じをもっていた。髪をみじかく刈っているのも、清潔な感じをつよめる。眉は濃い方ではなかった。唇が女のように小さくて、形がよかった。この家では、裕一が父とおなじ配電会社につとめていて、良子が高校生だった。新聞や週刊誌がほうりだされていても、すぐそばからたれかが片付けてしまいうらしい。家族の性格がしのばれた。

——最初の晩なので、食卓がこれほどかざられたのだろう。

くらしには困っていないだろうが、裕福な家庭とはいえなかった。トキのあつかいが、謙には気持よかった。謙は、裕一を口の重い男だとみたが、その観察はまちがっていない

かった。色が白くて、痩せていた。その白さが病人のようであった。神経質のようである。自分からはめったに口をきかなかった。はじめの内、謙はこだわったが、自分に対して悪い感情をもっているのではないことがわかった。わが家に他人がはいりこめば、たれにしても最初の内はこだわるものである。そんな距離や障碍をごく自然にとりのぞいてしまったのが、トキの朗らかな態度であった。長男は母親にいくるめられた形であった。

食事がつづいていた。あけっぱなしになっている玄関から、案内もこわずに、陽焼けた、がっちりした体軀の男がはいってきた。家族はことさら他人を迎えるような態度をとらなかった。身内のものと謙は思った。四十近いその男は、見知らぬ藤木謙をちらりとみて、

「良ちゃん、今晚は」

と、良子のうしろにあぐらをかいた。食卓をのぞきこむようにして、

「何かおいしいご馳走でもあるかね」

「信さん、このあいだのお鮎おいしかったわ」

良子が、男にいった。それがこの男を迎えるあいさつとなった。トキがつづけていった。

「今日からうちでお世話する藤木さんです。ほら、組合の笹谷さんがいった指導員の方ですよ」

「ああ、そうか」

と、謙の顔をみたが、何の感情もうかばない、ひとのよい表情だった。

「木山です」

電工の木山は、声が大きかった。しょっちゅう中高い電柱の上からしゃべっているの、自然と声が大きくなったものとみえる。木山のがらがら声に加わると、一段と茶の間はにぎやかになった。裕一がそれとなく席をはずした。自分の部屋にひきあげていく。裕一にはこうした雰囲気たえられないようである。謙は番茶をのみながら、木山とトキの話をきいていた。格別興味のある話題はなかったのだが、話をきいている内に、この村の生活が何となくわかるような気がした。謙は、トキの家に下宿するときまったとき、その女主人

が口も八丁だが、手も八丁ときかされた。そういうひとにありがちな、男を男とも思わない、果斷さと情熱を感じさせるかと多分におそれを抱いていたのだが、それほどでもなかった。農家の三女という履歴は、払拭されていないのだ。その上に町家の氣の利いた細君の感じが加わっているにすぎない。

謙が二階の自分の部屋にひきあげたとき、夜もかなり更けていた。木山はまだ話しこんでいた。床についた謙の耳に、地声の大きな木山の声がひびいた。トキの笑い声がそれにまじった。たれにきかれてもよいような話のもようだった。夜になると、ゆき場のなくなった男たちが、女主人のトキの家にくるのは、何の氣がねもいらなからであろう。木山は、裕一がとめている会社の人間である。そのことも木山には、トキのうちが親しく思われていたのだろう。

二

一ヵ月が経った。

お礼ごろもあって、謙は良子を丹阿弥市の映画館につれていった。バスで、一時間もかかった。

「兄さん、ちっともつれていってくれないのよ。孤独がすきなね。お母さんは、忙しいでしょう。といって、私ひとりで映画をみにいくわけにもいかないし、いままでは閉ざされた青春だったわ」

「これからは、ぼくがそれを解放してあげるのだ」と、謙は良子によい感じをもっていた。美貌とはいえないのだが、すくすくと育った、さっぱりとした娘である。制服が少し窮屈になっている。主人に死なれた当座は、暗い家庭だったろうが、今日の安定した家庭生活が、てきめんに年ごろの娘の上にあらわれているようであった。トキは小柄だった

が、良子は母より頭ひとつ大きかった。ひろい額のまん中に黒子^{はくろ}があった。いまの内に始末をしておかないと、大人になると黒子が大きくなって目ざわりとなりそうだ。謙は気にしていた。その黒子はぼつりとつき出しているので、注射をうち、焼きとってしまった方がよいのだ。が、それをいい出すほどまだ親しくはなっていなかった。「ぼくが新しい世界を、君んとこへ持ちこんだということになるね」

「兄さんは、はじめ反対だったわ」

「そうだろうと思った」

「私も不安だったけど、謙さんにきてもらってよかったと思ったわ。お母さんも、よろこんでるわ。兄さんも、謙さんに好意をもつようになってるわ」

「君のところには、いろんな男のひとがあそびに来るんだね」

「一種のクラブみたいなものよ」

「気安いからだろうね。お母さんが、たれかれの差別なく歓迎するからだ」

「そのくせ案外ちゃっかり屋よ、お母さん。みんな何かのためになるから歓迎してるんだ」

わ

「しかし、損得ずくでやっているとは思えないよ」

「三十後家だから、何ということなしに男の興味をひくんじゃないかしら」

謙は目を大きくして、

「そんな風に自分の母親をみてるのか」

「世間がそういうわ」

それだけのことらしかった。良子の知恵ではなかった。つきつめてそんな母の処世を考えているのではなかったようである。三十後家が男たちにどういう風に魅力的なのか、良子の知識では十分に分析ができなかった。それにこだわるようになれば、良子も神経質にならざるをえないだろう。

農協組合の理事の笹谷は、毎口一度トキの家をのぞいた。何かと声をかけていく。となりの農協の事務所に出勤するので、笹谷のふるまいは極く自然であった。

「笹谷さんは、この村の顔役だな」